

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：34301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884076

研究課題名(和文)ディケンズと絵画

研究課題名(英文)Dickens and the Visual Arts

研究代表者

木島 菜菜子 (Konoshima, Nanako)

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：90710418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はディケンズの作品が絵画から受けた影響や絵画に及ぼした影響を分析し、その結果をふまえて作品を読み直すことで、ディケンズ文学の特徴でもある事物の目に見えるような描写に、新しいアプローチを提示しようと試みるものであった。主な成果は、小説内で言及される絵画作品を同定したことやディケンズが同時代の画家に与えた影響を実証的に分析したこと、さらに絵画との比較を通して小説の読みどころを再評価したことである。

研究成果の概要(英文)：This project has attempted to analyze the visuality of Dickens's writing by focusing on the mutual influences between his creative imagination and the visual arts. It has aimed to develop the preceding results of research into new perspectives on Dickens's writings, especially his fiction, and has succeeded in identifying a painting in one of the novels, demonstrating the effect of his work upon contemporary art movement, and reassessing the design of a novel by comparing its climax scenes to works of art he had been well acquainted with.

研究分野：イギリス文学

キーワード：ディケンズ 絵画

1. 研究開始当初の背景

ディケンズの文章は発表当時から現代に至るまでその豊かな表現力が高く評価されてきた。近年は特にヴィクトリア朝時代に発達した科学技術や視覚文化の影響についての研究が進み、ディケンズと演劇や大衆文化との結びつきや、挿絵画家との関係の多くが明らかになってきた。また、ディケンズの表現方法が映画の手法を先取りしたとの評価は定着しつつある。しかし、例えば同時代の作家ジョージ・エリオットに関しては絵画との関係を総括的かつ体系的に論じた研究書が出版されているのに対し、これまでディケンズの研究では、絵画との関連はほとんど論じられてきていない。

1980年代前半にL.オーモンドが初めてディケンズ所蔵の絵画や親交のあった画家を調査したが、その結果は作品理解には結びつけられてこなかった。

これを受けてディケンズ生誕200年となった2012年、イギリスでは『ディケンズと画家たち』と題した展覧会が開催された。この展覧会は、「初めて」ディケンズと絵画というテーマで開催されたもので(Schweizer ix)、それはディケンズとその作品を「新しい」視点から見るといったといえる(Hollington 80)。しかしこの展覧会も、またそれに合わせて出版された論集『ディケンズと画家たち』も結局は、オーモンドの調査結果を確認するにとどまり、ディケンズの作品の解釈や理解を深めるような論考には発展させられていない。

2. 研究の目的

本研究は、上述の展覧会によってさらなる研究の必要性が認識されたディケンズと絵画との関係について、特にそれを作品理解に結びつけることを目的としている。本研究の目的は、ディケンズの文学と絵画との相関関係を実証的に示すことである。ディケンズは自分を「想像性溢れる写真家」と表現し、視覚的な表現に極めて意識的な作家であった。したがって本研究のテーマは視覚的な特徴を持つディケンズ作品の本質に関わるものであると言える。

本研究は上述のオーモンドの調査結果を踏まえた上で、ディケンズの創作における絵画的な要素を概念的または印象的な議論ではなく、手紙やジャーナリズムをも含めたディケンズおよびディケンズに関する同時代のテキスト、絵画資料を丹念にかつ実証的に調査することによって明らかにし、ディケンズ作品の新たな作品論を提示することを目的としている。本研究は、ディケンズの視覚的想像力が絵画から受けた影響や絵画に及ぼした影響をまとめ、その分析を作品理解に生かすことで、ディケンズ文学の核心にある視覚性に新しいアプローチを提示することを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は次の手順を追って行う。

(1) ディケンズが書いた全ての文章(作品、手紙、ジャーナリズム、スピーチ等)における絵画への言及を分析する。

(2) ディケンズの作品において視覚的描写が行われている箇所の中から、以下の3種類を分類する。

絵画から直接的ないし間接的な影響を受けた場面、風景、事物や人物の描写が行われている。

絵画への直接的な言及がなされている。

同時代以後の絵画作品の直接的な着想源となった場面や人物の描写が行われている。この中で、
、
に関しては対応する絵画作品の同定を試み、
に関しては画家がディケンズの文章からどのように着想を得たかを分析する。

(3) (1)、(2)の結果を作品の創作上の意図や全体の構想、テーマ等と関連付けて考察する。

4. 研究成果

本研究の成果は次の3点である。

(1) 小説やジャーナリズムにおける宗教画への言及の分析と小説の中で描写されるキリストの絵の同定、およびディケンズのキリスト像についての考察。

絵画に関するディケンズの意見の中で最も頻繁に引用されるものに、ラファエル前派の画家ジョン・エヴァレット・ミレイによる『両親の家のキリスト』(図1)について書いた「新しいランプの代わりに古いランプを」がある。



(図1)

ディケンズはこの記事の中でミレイの作品を痛烈に批判しており、多くの批評家はその理由や文体を分析してきた。

本研究ではこのミレイの作品とそれに対するディケンズの反応を、ディケンズの小説の中に描かれる他の宗教画への言及と比較することでディケンズの宗教観と宗教画に対する考えを検討した。

例えば後期の小説『ドンビー父子』において、不治の病を患う幼いポール・ドンビーは、キリストの絵を目にする(第14章)。オーモンドはこの絵をレンブラントの作品と推測しているが、1997年デント版の編者V. パートンはジョシュア・レイノルズの作品ではないかと注を付しており、共通認識は形成されていなかった。これについて本研究では、レイノルズのキリスト画の調査を行ったが、

ディケンズの描写に合致する構図のものは見当たらなかった。そして、作品の構図や表現内容、創作上の意図においてディケンズの描写の細部や小説内の場面における意図と合致するという点で、この絵はレンブラントの“Hundred Guilder Print”(図2)であると考えられることを確認した。



(図2)

その際特に、レンブラントもディケンズもそれぞれの作品において念頭に置いているマタイによる福音書第19章の記述や、ディケンズが『ドンビー父子』とほぼ同時代に子ども向けに執筆したキリストの生涯 *The Life of Our Lord* におけるキリストの描写との類似性も検証した。

『ドンビー父子』執筆の3年前に発表された『クリスマス・キャロル』でも幼いティムの死に関する場面で、聖書の同じ箇所が引用されている。このことから、ディケンズの想像力の中でキリストの子どもの祝福が小さな子どもの死の場面と密接に結びついていたことがわかる。これをふまえて考察してみてもこのレンブラントによるキリストの博愛の表現は、ディケンズが『ドンビー』において死にゆくポールに見せる図像として自然なものといえる。

同様に『互いの友』において、死の床にある幼いジョニーは、ベッドの上に掲げられたキリストの絵を目にする(第2巻第9章)が、オーモンドはこれをベンジャミン・ウエストによるキリスト画のいずれかではないかと推測していた。本研究では、ウエストのキリスト画のうち小説内の描写に合致する構図のもので、ディケンズが目にした可能性のあるものを調査した結果、*Christ Blessing Little Children*(図3)ではないかとの結論に達した。



(図3)

こうした幼い子どもの死の場面で描かれるキリスト像からも明らかなように、創作においてディケンズはキリストをセンチメンタルに描いている。彼の脳裏にあったキリスト像や、彼が子どもたちに伝えたいと望んだ

キリストの姿は、ミレイが『両親の家のキリスト』で描いた「リアリズム」に徹したキリスト像とは相容れないものであったと考えられる。

これまで多くの批評家によってディケンズは絵画を理解せず、彼の創作と絵画との関係は論じるに値しないと考えられてきた。しかし以上にみられるようにディケンズの視覚的な想像力と小説の中の場面構成に、現実に彼が目にした絵画がインスピレーションを与えていたことも確かなことであり、本研究はそのことを明らかにしたと言える。

(2) 同時代の画家 W.P. フリスへの影響と社会派リアリズム絵画の発展に及ぼした影響についての考察。

19世紀イギリスの画壇では、前世紀からの歴史画を頂点とする絵画の序列が依然として強い影響力を持ち、1850年代にも依然として同時代の社会というものを主題にした絵画がロイヤル・アカデミーに展示されることは珍しかった。同時代の画家たちに現代社会を描くという挑戦を喚起した作家の一人にディケンズがいると言われている。ヴィクトリア朝イギリスで最も人気を博した画家の一人フリスは、そのキャリアにおいてディケンズの強い影響を受けたことが知られているが、その中に、『ケイト・ニクルビー』(図4)と題された作品がある。



(図4)

版画しか現存しないこの作品は、これまでディケンズ研究者によってもほとんど注目されてこなかったが、1842年に制作の依頼を受けた時点でフリスがこの構図を選択したという事実は、ヴィクトリア朝絵画における社会派リアリズムの発展を考える上で興味深い。この分野の先駆者リチャード・レッドグレイヴが悲惨な境遇に置かれた女性たちを描き始めたのとほぼ同時期にあたるからである。本研究は、しばしば強い社会性を持つと言われるディケンズの作品が同時代の絵画に及ぼした影響について、特にフリスの『ケイト』に焦点を当てて同時代の他のお針子の図像との比較や、文学作品やジャーナリズムに表現された社会意識との比較を通して検討した。またディケンズと同様に社会性を意識した詩人のトマス・フッドの作品のレッドグレイヴへの影響と比較検討することで、1840年代における社会派リアリズムの一

端を明らかにした。

(3) 小説『デイヴィッド・コパフィールド』の海の描写の視覚的効果と作品全体のテーマとの関連についての分析。

ディケンズは「最愛の子供」と呼ぶ小説『デイヴィッド・コパフィールド』の第 54 章から第 57 章を含む第 18 月刊分冊を書き終えたとき、この分冊にはこの小説における最も優れた箇所が含まれていると手紙に書き残している。M. スレイターも指摘する通り、その箇所とは主人公の親友ステアフォースの死をもたらす嵐の場面と初恋の相手エミリーを乗せた移民船が夕焼けの海に浮かぶ場面だと考えられる。主人公のデイヴィッドは、この分冊において、特にステアフォースとエミリーという子ども時代から強い愛着を抱いていた二人の大切な人物を失う。作品を通して繰り返し用いられる海と難破のモチーフは、この嵐の海とステアフォースの難破の予兆となっており、この場面は物語のクライマックスを成している。A. アンドリュースは本書においてデイヴィッドは多くの死を経験することで大人になっていき、一つ一つの死の場面がデイヴィッドの成長の段階のしるしとなるものであると指摘しているが、ステアフォースを失う嵐の場面だけでなく、初恋の相手エミリーを失う移民船の場面もまた、デイヴィッドの成長の段階をしるしづけるものである。また同時にこれらの場面はディケンズの描写力を示す優れた例でもある。同時代に活躍した美学者ラスキンはこの嵐の描写を例にディケンズの描写力を賞賛し、この場面に J.M.W. ターナーの海の風景画に共通した芸術性を見いだしている。本研究は有名な嵐の海の場面とあまり注目を浴びてきていない移民船の場面という 2 つの海の場面に焦点をあて、多くの批評家が賞賛してきた本作品の視覚性を絵画との比較という新たな観点から検討した。

ラスキンは特に嵐の場面を褒めてターナーの作品にも勝ると評価している。また小説冒頭からエミリーに結びつけられる輝く海に遠ざかる帆船のイメージは、第 57 章の夕焼けに浮かぶ移民船として最終形を迎える。輝かしい夕日の赤い光の中に浮かぶ壮麗な移民船の描写は、その効果と隠喩においてターナーの『戦艦テメレル号』(図 5)に類似している。



(図 5)

ディケンズが実際に『戦艦テメレル号』を念頭に置きながらこの海の風景を執筆したかどうかは推測の域を出ないが、その夕焼けの効果は草稿でも下線を引いて強調され、夕焼けの海に浮かぶ船のイメージはその後も繰り返されて強調されている。アンドリュースも指摘するように本書において未熟さは一種の輝かしさを持っており、第 57 章最後の夕日に輝く穏やかな海の風景はデイヴィッドの青春の終わりを象徴しているともいえる。

本研究はこれら二つの海の風景描写をターナーの絵画を論じるラスキンの言葉やターナーの作品と比較検討しながら分析することで、自伝的側面に最も大きなエネルギーが注がれたと目される本作品においても、ディケンズは作品全体の構想を持ち、特にそのクライマックスを周到にそして極めて視覚的に作り上げていることを再評価した。

以上 3 点の研究から得られた成果は、(1) 小説内で言及される絵画作品の同定を行ったという点、(2) ディケンズの社会派リアリズム絵画への影響を実証的に検討したという点、そして(3) ディケンズの代表作の読みどころを新しく再評価したという点において、重要な成果であったと考えている。今後はこれらの成果について海外の雑誌で論文発表を行うとともに、特に(3)の成果をディケンズと風景画との関係の考察へと発展させて研究を進めていく予定である。

<引用文献>

1. Hollington, Michael. "Exhibition Report: 'Dickens and the Artists'; Exhibition Catalogue, *Dickens and the Artists*; and the associated Conference, 'Dickens and the Visual Imagination.'" *Dickensian* 109.489: 1 (2013): 80-81. Print.
2. Schweizer, Florian. "Dickens 2012: Celebrating Dickens's Bicentenary." *Dickens and the Artists*. Ed. Mark Bills. New Haven: Yale UP, 2012. ix. Print.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

木島菜菜子、「ディケンズ、フッドと『空腹の 40 年代』: 『ケイト・ニクルビー』と初期の社会派リアリズム」、西洋文学研究、査読無、第 34 号、2014 年、pp. 16-36.

〔学会発表〕(計 4 件)

木島菜菜子、「ディケンズの『クリスマス・キャロル』における想像性とリアリズム」、大谷大学英文学会、2013 年 12 月 12 日、大谷大学(京都府京都市)

木島菜菜子、「ディケンズと宗教画」、第 38 回ヴィクトリア朝研究会、2014 年 3 月 23 日、中央大学市ヶ谷キャンパス(東京都新宿区)

木島菜菜子、「*David Copperfield* における海の風景と J. M. W. ターナー」、日本英文学会第 86 回大会、2014 年 5 月 25 日、北海道大学札幌キャンパス（北海道札幌市）

木島菜菜子、「ディケンズ、フードと『空腹の 40 年代』：『ケイト・ニクルビー』と初期の社会派リアリズム」、大谷大学西洋文学研究会、2014 年 7 月 19 日、大谷大学（京都府京都市）

〔その他〕

Dickens and the Visual Arts: Literary Imagination and Painted Image（博士論文、京都大学）

「イギリス文学とオランダ絵画—19 世紀イギリスにおけるリアリズム文学とジャンル画の関係について—」2014 年 4 月 12 日、第 16 回エコール・ド・東山

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木島菜菜子 (KONOSHIMA, Nanako)

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：90710418